

進行形と単純形の意味論*

岩部 浩三

本稿では、英語における単純形と進行形の意味の問題を再検討する。この問題を直接扱った論文としては、Goldsmith & Woisetschlaeger(1982)があるが、そこで提示されている「構造」と「現象」という認識論的な対立概念を再吟味するところから始める。その後、第2節と第3節で単純形と進行形をそれぞれ独立して論じる。まず、単純形については Carlson(1995)と Cohen(2002a,b)の総称文の分析を土台にして Goldsmith & Woisetschlaegerの「構造」という概念のあやふやさを指摘し、その原因の特定に向かう。進行形については、Dowty(1979)を始めとする惰性世界 (inertia world) に基づいた分析を採用し、「現象」とは何かを追求したい。最後に第4節において、従来あまり論じられていない「過去時制における単純形と進行形」について現在時制との違いを指摘する。とりわけ、過去時制における総称・習慣文には規範的読みが存在しない、という新しい提案を行う。さらに、進行形と単純形の類似点と相違点を明らかにしたい。

1. 構造と現象

Goldsmith & Woisetschlaegerによれば、単純形は「構造」を、進行形は「現象」を表すという。その趣旨を彼らの用例を用いて簡単に紹介しておこう。

たとえば(1)の例においては、確かに目の前に「エンジンが煙を出している」という現象が存在している。

(1) Look, the engine is smoking.

エンジンを止めてしばらくすれば、煙が出るという現象は消失するので、(2)のように言える。

(2) The engine isn't smoking anymore.

一方で、このエンジンが修理された後には、(2)ではなく(3)が適切であろう。

(3) The engine doesn't smoke anymore.

(3)を発話する際に、エンジンを実際に動かしてみる必要はない。それに対し、修理後にエンジンを試運転して煙がないことを確認したのなら、やはり(2)がふさわしい。進行形は、「煙が出ていない」という現象をありのままに記述しており、修理を施したかどうかとは直接関係がないからである。逆に、修理という車の構造変化を述べる場合は、単純形を用いるべきである。(3)はエンジンの構造上の変化そのものを述べているのであるから、具体的に「エンジンがかかっているのに煙が出ない」という事態がその場に存在する必要はないのである。したがって、修理後、試運転をするまでもなく、(3)の発話が可能になる。

このように、Goldsmith & Woisetschlaegerの「構造」と「現象」という対立概念は直感的に捉えやすく、一定の妥当性を有するものと考えられる。

2. 構造とは何か：総称文と一般化

Goldsmith & Woisetschlaegerは、(4)のような単純現在の文についても、構造を表すという見解を取る。(4)のような例は一般に習慣を表すとされ、「ビルが学校に行く」という事象が何度か繰り返され、それを基に一般化が行われていると考えられる。しかしながら、彼らはこの考え方を否定する。(4)は始めから習慣というある種の構造を直接表しているのであって、具体的な事象から一般化されて得られたものではないというわけである。

(4) Bill walks to school.

確かにこの考え方には一理ある。たとえば、例(5)は、設計図だけを見ながら発話することが可能であるという。

(5) This car runs on kerosene.

実際には、灯油を燃料とする車は試作車さえ作られず、いまだかつて灯油で走行する自動車がこの世に存在したことはないと仮定しよう。それでも、原理的な話として(5)は可能であるからである。

このような考え方は、総称文に対する規則・制約的アプローチ (Rules & Regulations Approach) を想起させる。Carlson (1995) は総称文について、帰納的アプローチ (Inductivist Approach) と規則・制約的アプローチを比較している。

- (6) Professors are confident.
- (7) Bishops move diagonally. (ビショップ (=角) は斜めに動く)

例文(6)は、大学教授に関する経験的な観察結果を一般化したものであると考えられる。したがって、「ほとんどの大学教授は自信家である」という程度の解釈が与えられる。¹ いずれにしても、(6)には帰納的な解釈がふさわしい。それに対して、(7)はチェスのゲームを詳しく観察した結果得られた一般化ではない。始めにルールがあって、チェスというゲームが成り立っているのであって、(6)とは異なり「多くの場合、角は斜めに動く」というような解釈にはならない。(7)は規則・制約的アプローチにふさわしい例であって、(7)のような総称文の真理値は「角は斜めに動く」というルールそのものがこの世に存在していることによって裏付けられることになる。すなわち、この世の中の構造の一部としてチェスのルールも存在しているというわけである。

ここで言う総称文とは、(6)や(7)のような無冠詞複数形の例だけでなく、(4)のような習慣文や(5)のような例もすべて包括する概念である。総称文に対する両アプローチについて、もしどちらか一つを取るならという条件付きで、Carlson は規則・制約的アプローチに軍配を上げている。その根拠には上で見た(5)や下の(8)のように具体的な事象が一つもない場合が挙げられる。

- (8) John sells vacuum cleaners.

ジョンは掃除機の販売員として雇用契約をしており、販売活動は行っているが、まだ1台も売れていないとしよう。それでも、(8)は真である。規則・制約的アプローチにおいては、職務を規定したルールの存在によって(8)がサポートされるからである。それに対し、帰納的アプローチにおいては、(8)が真であるという直観を説明することはできない。具体的なデータが一つなければ、帰納のしようがないからである。また、帰納的解釈がふさわしいとされる(6)のような例についても、規則・制約的アプローチを取ることは

不可能ではない。この文を直接支えているのは、多くの自信家の教授の存在ではなく、「大学教授は自信家である」という規則性そのものであると考えることもできるからである。Carlsonの趣旨は以上の通りであるが、ここで言う規則・制約は、Goldsmith & Woisetschlaegerの「構造」の一種と読み替えることができるであろう。

Carlsonのこの帰結はかなり自然なものであると感じられるが、Cohen (1999a)はCarlsonに捨てられたかに見える帰納的アプローチを採用した。Cohenの原則はきわめてシンプルで、基本的に「一般化は過半数のことからによって成立する」と考える。すぐに問題となってくるのは、今までに一度も起こっていないことがらを述べた(5)や(8)などである。Cohen(1999a)は、一貫して帰納的アプローチの立場で分析を行っているが、別の論文Cohen (1999b)では暗に規則・制約的アプローチを認めるようなことを述べている。すなわち、南極から手紙が来たことがない場合の(9a)や、緊急事態が生じたことのない場合の(9b)について、(10)のように述べているからである。

- (9) a. Mary handles the mail from Antarctica.
 b. Members of this club help each other in emergencies.

- (10) Note that we are only concerned with the descriptive readings, and not with the prescriptive reading. According to the latter type of reading, (3a) [= (9a)] is true just in case handling Antarctic mail is Mary's job, and (3b) [= (9b)] expresses the existence of a rule obliging club members to help each other in emergencies. Suppose mail from Antarctica does come in, but Mary does not do her job properly, so the mail gets piled in the office and nobody takes care of it; suppose emergencies do eventually occur, but it turns out that club members fail to help each other. In these cases, the sentences in (3) [= (9)] would remain true under their prescriptive reading, but would be false under the descriptive ones. (Cohen (1999b: 222-223))

例文(9a)を取り上げて(10)の趣旨をまとめると以下のようなになるであろう。

(11)		記述的読み	規範的読み
	南極からの手紙が来ていない場合	真(?)	真
	今後南極からの手紙が来て、Mary が取り扱いをしなかった場合	偽	真

規範的読みは、「南極からの手紙は Mary が取り扱う」という職務（規則）の存在によって真偽が決まるのであるから、Mary がその職にあるかぎり、彼女の実際の行動がどうであろうと関係なく真であることになる。そして、規範的読みが Carlson のいう規則・制約的アプローチであることも間違いない。

問題は記述的読みである。現時点では南極からの手紙が来ていなくても、(9a)は真であると判断されるのであるが、それは記述的読みで真であると言えるのだろうか。「南極から手紙が来て Mary が取り扱いをしなかった場合」が偽であるというのなら、「南極から手紙が来て Mary が取り扱いをした場合」こそが真であるはずである。ところが、現時点で南極からの手紙は来ておらず、将来、それが来た場合に Mary がどうするかわからない状態で、記述的に真であると言えるのだろうか。南極からの手紙が来ていない場合について、無標の解釈として、Mary がきちんと取り扱った場合の方を想定して良いのかということである。Cohen はそれを肯定している。私は、Iwabe (2002)において、それを受け入れがたい主張として否定した。まだ起こっていないことを数え上げて一般化するなどということは、認識論的矛盾である、と。Mary が取り扱いをしなかった場合に偽になる、というのは理解できる。Mary がきちんと取り扱った場合に真になる、というのも良い。しかし、将来がどうなるかわからない現時点において、(9a)の文は、記述的読みにおいて、真とも偽とも決められないのではないか。すなわち、(9a)の文は規範的読みにおいてのみ真である、と考えるべきではないだろうか。

Cohen (1999b)は、(9b)を取り上げて、記述的に真である理由を以下のように述べている。

- (12) Similarly, (23b) [= (9b)] does not require that club members actually help each other in emergencies, merely that they be likely to do so. That is to say, in all sufficiently long histories

which contain emergencies, club members will help each other in most cases. Again, while the constitution of the club may (but does not necessarily) help us make a prediction about how members would behave if and when emergencies occur, the meaning of (23b) [= (9b)], under its descriptive reading, does not refer to the constitution.

将来の長い年月を考慮に入れれば、緊急事態の発生することも当然あるだろう。そうなれば、ほとんどの場合、クラブ会員は助け合うであろう。確かに、助け合いを義務づけた規約があることは、このような予測の手助けになるという面もあるが、必然的なものではない。(9b)が真か偽かは、この規約の存在によるのではなく、クラブ会員がどのように振る舞うかによって決まる。

私は、このような説明にまったく納得できない。将来において発生することを予測した記述的読みというものの存在自体に合点が行かないからである。未だ生じていないことならについては、記述的読み(=帰納的アプローチ)は存在せず、規範的読みしか存在しないと考えるべきであろう。ただし、ルールが存在すればそれだけで総称文が真になるわけではない。将来に向けての予測が不可欠であると思われる。その点に限れば、Cohenのこの部分の指摘は重要であり、Carlson流の規則・制約的アプローチは不十分である。この問題は、過去における総称・習慣文との関連で第4節で立ち戻ることにはしたい。

3. 現象とは何か：Dowtyの進行形分析

進行形が使用されるとき、それに対応する現象があることは確かである。それでは、目の前にある現象それだけで進行形を使用するのに十分なのであるだろうか。それは否である。「あることがらが進行中である」と言えるためには、それが完結した状態を想起できなければならないからである。Dowtyは、できごとの完結を保証するために、惰性世界(inertia world)という概念を導入している。ここでは、進行形の分析としてDowty流のアプローチを採用する。以下は、その簡単な概略である。

まず、進行形とは、単純形によって表されるできごとの持つ時間間隔(interval)の一部分(subinterval)を取り出したものである。(13)によって述べられたできごとの中の一部を切り出したのが(14)である。

(13) John walked.

(14) John was walking.

(15)のような瞬間的なできごとの場合、一部を切り出すことは難しい。実際、進行形(16)は動作の繰り返しを表しており、(15)の interval より逆に長く感じられ、一見ここでは subinterval という定式化が不都合に思われる。

(15) John jumped.

(16) John was jumping.

実は、(16)が対応する単純形は一度きりの動作を表した(15)ではなく、(17)である。単純形は繰り返し動作を記述することが可能で、とりわけ many times/repeatedly といった副詞を補ってやればはっきりする。

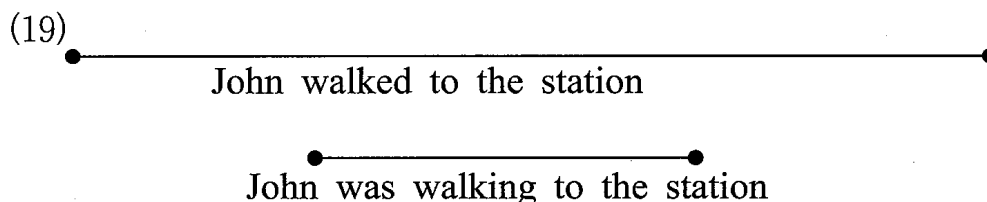
(17) John jumped {many times/repeatedly}.

進行形(16)が(17)を基にした subinterval であるなら、Dowty の分析に矛盾はない。

さらに、単発動作の(15)に直接対応する進行形も、文脈を整えてやれば可能である。絵や写真の中では、瞬間的な動作も停止しているからであり、空中に浮いた状態を(18)のように述べることができる。

(18) In this picture, John is jumping.

以上の所見から、Dowty 流の subinterval を用いた進行形分析を図式化してみると(19)のようになる。



さて、注意すべきは、ジョンが実際に駅に到着した場合は、単純過去形の John walked to the station が成り立つが、途中で気が変わったり、何か別

の理由があって、結局は駅に行かなかった場合でも、進行形の John was walking to the station は発話可能であるという事実である。(20)の例では、不幸にも道路を横断中にトラックに轢かれてしまって、向こう側に行き着くことはできなかつたのである。

(20) Mary was crossing the street (, but she was run over by a truck).

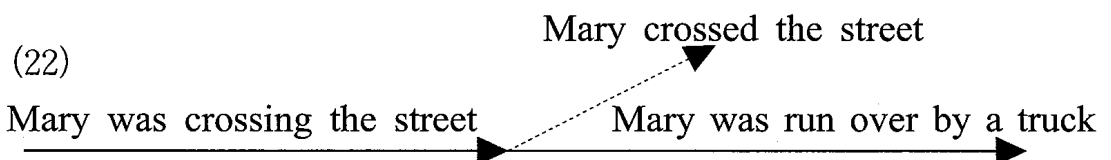
そもそも、ここでは横断というできごとがなかつたのに、どうして横断中であつたと言えるのであろうか。これは、未完結のパラドックス (imperfective paradox) と呼ばれる問題である。まず考えられるのは、メアリーが横断するつもりであつたという主語の意味である。しかしながら、Dowty はそれを否定する。

90歳の作曲家が交響曲を作曲中であつたとする。年齢的に全楽章の完成はとて無理な状況で、作曲家本人にもその意思はないとする。それでも、(21)は可能であるという。

(21) He is writing a symphony. (Dowty (1979:134))

また、そもそもメアリーとは何の面識もない新聞記者でさえ(20)のような記事を書くことが可能である。客観的には、メアリーが事故当時道路の真ん中付近にいたという状況があるのみで、彼女が何をやるつもりであつたのかはわからない。当の本人はこの世の人ではなく、もはや確認のしようもない。

Dowty は惰性世界 (inertia world) という概念を用いて、この問題の解決を図っている。惰性世界とは、もし障害がなかったら当然実現していたであろう世界と考えてよい。(19)は(22)のように書き改められるべきである。



単純過去形で表される Mary crossed the street というできごとは、現実世界では途中ましか実現せず、分岐点から上方に延びる惰性世界にかけて全体像が示現している。進行形で表される事象は、その前半部分であり、この部分は現実世界と共通である。すなわち、進行形は、惰性世界を参照しながら

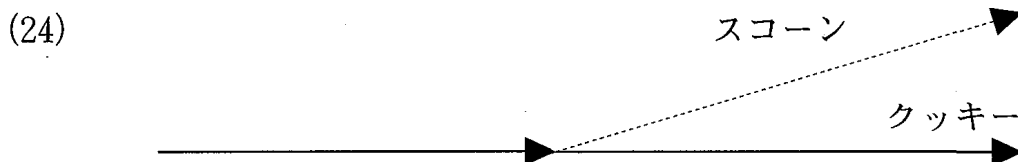
全体像を把握し、そこから subinterval を切り出すという操作を行っていることになる。

ここでも、トラックが走ってくるという偶発的な障害がなければ、できごととは現実世界でも実現したと想定され、現実問題として、惰性世界と現実世界は一致することも多いはずである。したがって、過去進行形の場合は、参照すべきできごと全体が現実世界に存在するケースが少なくない。一方、現在進行形の場合は、記述されるできごとが発話時にはまだ完結していない。(22)の図式で言えば、分岐点より左側に発話時があり、将来どうなるかわからない時点にいる。たとえば、(23)の例においても、ジョンが描いている図形が円になるかどうかはまだわからない。図形の曲がり具合などから結果状態を予測し、「円を描いている」という推定描写を行っているだけである。

(23) John is drawing a circle.

惰性世界についてのさらに詳しい研究として、Mizuta (2002) を簡単に紹介する。

以下のような状況を想定してみよう。メアリーはスコーンを作るつもりで、粉をこねて生地を作り、オーブンで焼いた。しかし、ふんわりとふくらまず、できあがったものはクッキーとしか呼べないものであった。図示すると以下の通りである。



さて、分岐点以前の事態はどのように記述できるであろうか。メアリーはスコーンを作っていたのか、クッキーを作っていたのか、どちらであろう。メアリーの意思を尊重するなら、スコーンである。しかし、現実にはできたものを重視するならクッキーである。Mizuta によれば、どちらも可能であるという。

このことは、進行形が「目の前にある現象をありのままに忠実に記述している」と言えないことを意味する。(24)の分岐点以前の部分は一つであり、まったく同じ現象である。しかしながら、進行形には異なった二つ以上の可能性があり、話者の解釈が入ってくる。いや、むしろ主観的な解釈を入れな

い限り進行形は使えないと言うべきである。

惰性世界に関するもう一つの問題は、(25)のような例に関係する。

(25) John and Bill built a house.

(26) John and Bill were building a house.

ジョンとビルが共同作業で1軒の家を建築していた。ジョンは土台部分を担当し、ビルは柱を立て屋根をかけた。進行中のできごとを記述するのに、(26)であれば今までの分析でも問題はない。ところが、それぞれの分担している作業部分を(27)や(28)のようにも記述できる。

(27) John was building a house.

(28) Bill was building a house.

問題は、(27)と(28)に対応する単純形がこの文脈では不適切であることである。

(27') #John built a house.

(28') #Bill built a house.

一人でそれぞれ別の家を建てていることを含意する(27')と(28')が成立すると、家が2軒できてしまう。Mizutaは、一言で言うと、惰性世界を単純過去形の(27')や(28')のような形ではなく、主語を捨象した述語だけの形式で記述しようとしている。

このように、惰性世界と進行形との対応関係には複雑な問題も絡んでくるが、本稿の趣旨からは、進行形の記述には話者の解釈とか予測という要素が必須であり、それなくしては進行形は使えないということを確認すれば十分である。前節では、「構造」という概念を明示化する必要性を述べたが、本節では「現象」という概念と進行形との関係について、Dowtyに従って精緻化を試みた。

4. 過去における単純形と進行形

Goldsmith & Woisetschlaegerの単純形と進行形の対比は、現在時制の用例ばかりを扱っているが、特に現在形に限るという限定はなく、過去時制

においても成立するという暗黙の了解があると思われる。実際、過去時における総称・習慣文は存在する。

(29) Bill ate meat when he was young.

(30) In those days the ghosts enjoyed Halloween, and little children stayed indoors. (Leech(2004:14))

(31) Tyrannosaurus rex lived in a humid, semi-tropical environment.

(29)は「ビルが若い頃はよく肉を食べていた」ことを表している。(30)は、既に廃れてしまった風習を述べている。(31)は絶滅したティラノサウルスという恐竜の総称的な性質である。これらの例は、特定の出来事を述べているのではなく、過去時制における総称・習慣文は現在時制と同様に存在すると考えて良いであろう。²

しかしながら、現実にも一度も具現しなかった場合の総称・習慣文は、過去時制においては不可能であり、現在時制の場合と対照を成している。このことについて従来あまり注意が払われていなかったが、本論文でははっきりと指摘しておきたい。職務とか習慣を含む広い意味における規則性自体は、過去においても存在していたはずであり、その点について現在時制との間に違いがあるとは思えない。となると、これらは規範的読みにおいては真になっても良いはずであるのに、そうはならない。

(32) a. Mary handled the mail from Antarctica.

(Krifca et al.(1995:9))

b. John sold houses.

c. Members of this club helped each other in emergencies.

メアリーが郵便局員であったころ、南極からの郵便物が届いたらそれを取り扱う職務にあったとしても、実際には一通も来なかったとすれば(32a)は不適切である。同じように、ジョンが建て売り住宅の販売員として販売活動をしていたとしても、在職中に一軒も売った実績がなければ(32b)は使えない。(32c)も同様で、助け合いの実績がなければ不可能である。³ もちろん、実績がある場合には、それぞれの職務に就いていたとか、規則に従っていたという含意を伴うことができる。

このことは、Carlson が総称文の真偽値を与える方法として採択した規則・

制約的アプローチにとって重大な問題となる。総称文の真偽値は、できごとの具体的実現の有無とは独立し、最終的には規則や制約の存在のみに依存し、(32)のような例は真にならざるを得ないからである。しかしながら、過去形の場合、これらの文は偽であり、規範的読みは存在しないと考えるをえない。そうなれば、どうしても帰納的アプローチを採用しなくてはならないことになる。

現在形との違いをここで整理しておこう。まず、雇用契約をはっきり表す形式は(33)であろう。ここでは、現在形も過去形も、販売実績の有無にかかわらずジョンの職業を記述している。

- (33) a. John is a salesman of houses
- b. John was a salesman of houses.

次に、進行形の場合も、販売実績がなくても可能である。とりわけ過去形の(34b)も問題ない。

- (34) a. John is selling houses.
- b. John was selling houses.

サンドイッチのように簡単に売れる商品ならば、(16)のジャンプの例のように、販売は瞬間的なできごとと等しく、実際に進行形(35)においては、繰り返し売れていることが含意される。ところが、住宅のようになかなか売れない商品の場合は、売れるまでの努力の部分が長く、簡単には結果が出ず、惰性世界でしか全体像が示現しないという場合が容易に想像できる。前節で論じたとおり、進行形は、現実世界における完結を必ずしも求めず、惰性世界における完結を前提として解釈することができる。

- (35) John is selling sandwiches.

過去形の場合、実績の有無を問わずに職業を表そうとすると、単純過去形は使えず、(33b)のような名詞表現にするか、あるいは販売活動を含意するために動詞表現を使うなら、(34b)のように過去進行形にするしかない。

ちなみに、日本語において職業を表す動詞表現は現在時制でも過去時制でもテイル形である。英語の進行形と同様、販売実績は必ずしも必要とされな

い。

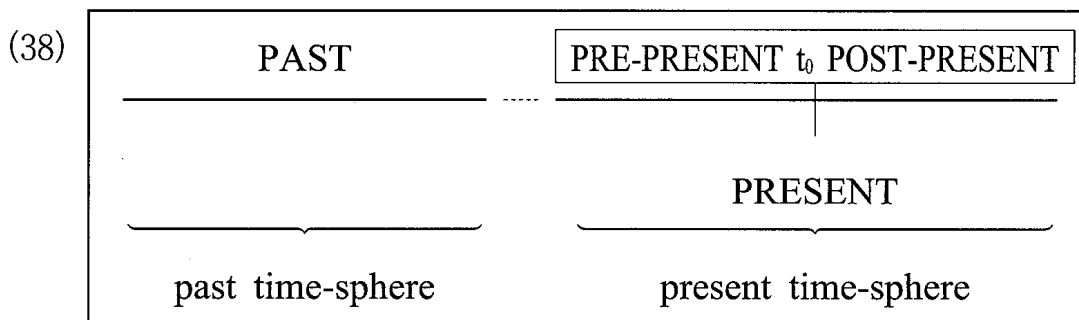
- (36) a. ジョンは住宅を販売している。
 b. ジョンは住宅を販売していた。

過去時制において単純過去形の規範的読みが成り立たないのは、Carlson や Cohen の主張と異なり、規則や規約が存在するだけでは総称・習慣文を真にするのに十分でないからである。規範的読みは、将来的にそれが成立するという想定があって初めて成り立つと考えるべきである。すでに述べたように、現在形の(37)と過去形の(32b)との違いは、販売実績を必要とする(32b)に対して(37)は発話時点では販売実績を必要としないという点であった。

- (37) John sells houses.

正規の販売員として雇用されていたのであれば、契約という規約が存在する点では両者に違いがなく、Carlson の規則・制約的アプローチや Cohen の規範的読みでは差が出てこないはずである。両者の違いは、すでに現実世界において実績を上げる可能性が閉じている過去形と、将来に向けてその可能性が開いている現在形という点にある。

下の(38)は Declerck(2001)の時制モデルである。この図式に限れば、特異な主張は含まれておらず、穏当なモデルとしてそのまま採用することにしたい。まず、全体が大きく過去時領域と現在時領域に分かれており、発話時(t_0)は当然現在時領域に含まれる。ここの議論と関係するのは、過去が現在時領域から切り離されていることと、未来が後現在 (POST-PRESENT) として現在時領域に含まれていることである。



(Declerck(2001:112))

発話時(t_0)から見た未来のできごとは、現時領域内の連続的な延長線上にある。つまり、まだ一度も実現していないことがらであっても、現存する規範などを基に、将来の実現を予測的を述べることは発話時において可能である。これが単純現在形の規範的読みに相当する。一方で、過去は現在から切り離され、確定した領域にあり、そこで実現しなかったことがらにはもはや実現の可能性はない。過去において何らかのルールや規範が存在していたとしても、実際に実現する可能性がなければどうにもならない。過去形に規範的読みがない所以である。

さて、習慣や法則性は、ある種の惰性を表すと考えられる。実現した例が数多くあれば、その背後に惰性を感じる事が可能である。これが総称・習慣文の記述的読みに相当する。そして、実現した例が存在するのは、上のモデルの過去と前現在の部分である。したがって、記述的読みは過去形にも現在形にも存在する。現在形の場合は、前現在の事例を基に得られた法則性つまり惰性は、その延長線上にある後現在にも適用される。しばらく見守っていればまた必ず実現するであろう、という予測的惰性である。それに対して、発話時以前に実現した例がなく、この予測的惰性の根拠となるのが規則・規約だけである場合が、ここで言う規範的読みである。

もう一つ、具体例を観察してみよう。ある店に(39)のような貼り紙があったとする。

(39) Shoplifters are prosecuted in criminal court.

万引きはれっきとした犯罪であるから、裁判所で裁かれるべきものである。そういう意味では(39)は真である(規範的読み)。しかしながら、現実には、万引き犯のうち実際に捕らえられて起訴される例はわずかであろう。このような現実に基づいて、(39)の貼り紙にもかかわらず万引きを働く者は、(39)が記述的読みにおいて偽であると認識しているはずである。本論文の主張が正しいならば、過去時において同じような万引き野放し状態があった場合、(40)は真になり得ないことになる。規範的読みが過去時制では成り立たないからである。

(40) Shoplifters were prosecuted in criminal court.

もちろん、問題にしているのは総称・習慣文としての解釈であって、わずか

でも起訴の実績があれば、万引き犯が何人か起訴されたという特定のできごとを述べた読みが真になるのは当然である。総称・習慣文として(40)が真になるためには、法律が存在していただけでは十分でなく、実際にそれが守られ、ほとんどのケースで裁判が行われていなければならない。一方、現在形の(39)が真であるとすれば、法律の存在を基に「たとえ現在はそのようなようになっていなくとも、将来は法律の規定しているとおりの状況が来る」ということを予想しているからである。そもそも、我々が規則・規約を受け入れるということは、そのような将来を築き上げる義務を負っているということにほかならない。事情は、第2節で言及した(41)のような例でもまったく同様である。

(41) Members of this club help each other in emergencies.

発話時までは、たまたま緊急事態が生じていないということで、実現することがなかったとしても、そのような偶然的な要因がなくなれば、(41)に規定されたとおりになるはずである。あるいはそうする義務が課せられている。(39)の場合、事情はやや複雑に感じられるが、犯罪件数が多すぎるとか、検事の数が少ないとか、規則どおりの状況を妨げる何かがある。それが取り除かれれば、(39)が実現されるはずである。以上が規範的読みの本質であると考えられる。

第3節では、進行形の分析における情性世界の役割を Dowty に従って論じたが、類似のパラダイムが単純形の総称・習慣文の場合にも成立していると言える。ただし、進行形が過去時領域と現在時領域の両方において、現実世界における中断とその後の情性世界における継続・実現を問題にできるのに対し、単純形が予測的情性を担えるのは現在時領域だけである。

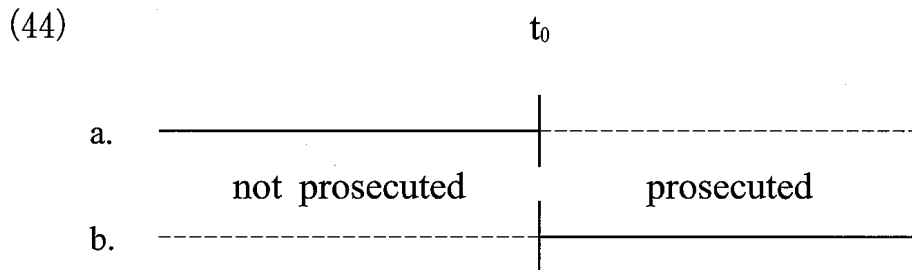
進行形と単純形のこの違いを図式的に述べるならば、進行形が現実世界を離れて情性世界という別の可能世界への分岐を許すのに対して、単純形の場合は、分岐が許されないということになる。すなわち、第3節の(24)の図((42)として再掲)で見たように、メアリーはスコーンを作るつもりでいたのに、できたものはクッキーであったという場合、前半の共通部分について、Mary was making scones とも言えるし、Mary was making cookies とも言えるのであった。



それでは、単純形の(39)はどうであろうか。過去形(40)の場合は解釈にあいまい性が生じないので問題にならないが、現在形には記述的読みと規範的読みが可能なのであった。社会の現状が既に述べた通りであるとする、記述的読みでは(39)は偽、すなわち(43a)が真であり、規範的読みは(43b)のとおりである。

- (43) a. Shoplifters are not prosecuted in criminal court.
 b. Shoplifters are prosecuted in criminal court.

これを図示すると(44)のようになる。



実線部分が一般化の根拠とされる部分である。すなわち、(43a)に対応する(44a)においては、「万引き犯のほとんどは起訴されていない」という現実に基づいて、それを未来(破線部分)にまで拡張した記述的読みを表している。一方、(44b)は規範的読みである。破線部分の現実ではなく、将来の実現(実線部分)を基に(43b)の真理性を主張している。いわば、後現在を根拠に一般化を成り立たせ、それを前現在にまで拡張しているわけで、結果的には(43a)と正反対の内容になる。いずれにしても、前現在と後現在が一本の線につながっていればこそ成せるわざである。分岐を許す進行形との違いは明らかであろう。このように、単純形の記述的読みと規範的読みはそれぞれ独立していて共通部分はない。このことから、総称・習慣文に対して規則制約的アプローチと帰納的アプローチの両方を認めるべきであるというIwabe(2002)の主張が裏付けられるであろう。

最後に、Cohen や Carlson の主張を振り返りながら、本論文の結論をま

とめておこう。Cohen の言う意味での規範的読みは「規則が存在すれば、現実がどうであろうと真」というものであった。Carlson の規則・制約的アプローチにおいても、同様の方法で真偽値が与えられた。我々はこのような意味での規範的読みは、その存在自体を否定する。我々が言う規範的読みとは実態においては、Cohen の言う「未来に関する記述的読み」に近く、それは現在形においてのみ認められる。ただし、Cohen とは異なって、それは帰納的アプローチになじむものではなく、記述的読みとはしない。

過去時制においては規範的読みは存在しない。したがって、過去における総称・習慣文の真偽値は、規則・制約的アプローチによって与えることはできず、帰納的アプローチによるしかない。結局、Carlson の「もしどちらか一つに絞るとするなら、規則・制約的アプローチが正しい」という主張は退けられ、Iwabe (2002) で前提としたように、両アプローチは併存すべきであることが再確認された。

註

* 本論文は、平成15年度～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「時制とその周辺領域の統語的・意味的研究」（研究代表者 岩部浩三 課題番号15520311）による研究成果の一部である。

1 あるいは、Iwabe (2002) が指摘しているような例外指定の総称文の場合には、自信家の大学教授が全体の半数以下の少数であっても成り立つ。つまり、自信家が存在するような職種は他になく、例外的に大学教授だけが自信家を含んでいる場合には、その自信家の数はわずかであってもかまわない。

2 過去において繰り返し生じたできごとについては、used to という形式がある。

(i) a. I used to go for a swim every day.

b. When I was young, my grandfather used to tell me frightful stories of the War.

(Leech (2004:53))

Leech (2004) の言うように、used to には対応する現在形がなく、対応する

解釈は単純現在形で表される。単純現在形の無標の解釈が習慣読みであるのに対し、単純過去形では習慣読みが有標であるからであろう。もっとも、単純現在形には「一度も起こっていない」解釈が可能であるのに対し、used to には一度も起こらなかったことがらを表す用法はなく、単純過去形の習慣読みと変わるところはない。

3 Krifca et al.(1995)は、(32a)について次のように述べている。

In this case, (22a) [= (32a)] has two readings; it can either mean that Mary was in charge of the mail of Antarctica in general (even if there never was some real mail from Antarctica), or that she handled some particular batch of mail of Antarctica.

過去形において、実績が一度もないのに職務の読みが可能であるとしている点で、本論文の主張と異なっているように見える。しかし事実はそうではない。

インフォーマントに判断を求めたところ、まず(32b,c)については、問題とされる実績なしでは職務の読みはまったく不可能とのことであった。(32a)については、handle という動詞それ自体が職務の含意を持ちうるため、可能となるかもしれないとのことであった。sell や help がはっきりとした具体的行為を表すのに対して handle は抽象的な解釈が可能であるという点に違いがある。また、対応する現在形の場合は、動詞の違いによって容認可能性に差が出てくることはないとの判断である。sell や help の場合もまったく問題なく、実績なしで職務の読みが可能である。

以上の観察から、「過去時制においては、実績なしで職務を表す読みは不可能である」との主張は損なわれていないと考える。少なくとも、具体的な行為を表す読みにおいては主張どおりである。また、述語それ自体が職務を表すのであれば、John was a salesman of houses が実績なしに職務を表しうると同じことで、総称・習慣文という形式に由来する読みとは別の問題であろう。

参考文献

Carlson, G. N. (1995) "Truth Conditions of Generic Sentences: Two Contrasting Views," *The Generic Book*, ed. by G. N. Carlson and F. J. Pelletier, 224-237. University of Chicago Press, Chicago.

- Cohen, A. (1999a) *Think Generic!: The Meaning and Use of Generic Sentences*. CSLI Publishers, Stanford.
- Cohen, A. (1999b) "Generics, Frequency Adverbs, and Probability," *Linguistics and Philosophy* 22: 221-253.
- Declerck, R. and S. Reed (2001) *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dowty, D. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Dowty, D. (1986) "The Effects of Aspectual Class on the Temporal Structure of Discourse: Semantics or Pragmatics?" *Linguistics and Philosophy*, 9: 37-61.
- Goldsmith, J. and E. Woisetschlaeger (1982) "The Logic of the English Progressive," *Linguistic Inquiry* 13-1: 79-89.
- Iwabe, K. (2002) "Generics and Homogeneity," *English Linguistics* 19-2: 461-480.
- Krifca, M., F. J. Pelletier, G. N. Carlson, A. ter Meulen, G. Link, and G. Chierchia (1995) "Genericity: an Introduction," *The Generic Book*, ed. by G. N. Carlson and F. J. Pelletier, 1-124. University of Chicago Press, Chicago.
- Leech, G. (2004) *Meaning and the English Verb*. Third ed. Harlow: Pearson Education.
- Mizuta, Y. (2002) "A Semantic/Pragmatic Account of the English Present Progressive of Creation Verb - *John is building a house*," *CLS 38 The Main Session*, 453-467.